

「親子関係の友だち化」の検討  
— 青年期女子の母娘関係と自尊感情を通して —

須 藤 春 佳

Does a Parent-Child Relationship Become Like Friendship in Adolescence?  
The Association between Mother-Daughter Relationships and Self-Esteem in Female Adolescents

SUDO Haruka

## 要 旨

思春期から青年期は「第二の分離・個体化」の時期とされ、子どもが心理的に親からの分離を行い、個としての自己を形成することが課題となり、親に対して秘密を持つことや、同性友人との間で親密な関係を築くことが重要となる。ところが最近の傾向として、親子関係の友だち化と言える現象があると指摘されている。本研究では、従来より認識されている親の養育態度（養護・過保護）と、対等な友人関係に相似した親子関係を、PBI 尺度および chumship 体験尺度を用いて測定し、娘の自尊感情との関連を検討した。その結果、大学生女子が想起した16歳までの母親の養育態度の「養護」の傾向が強いほど、また「母親との連帯・共有の強さ」「母親との同一化」の傾向が強いほど、自尊感情が高かった。本来は思春期頃に同性友人との間で体験する関係性を、母親との間で体験することが、娘の自尊感情との関連を示した。この結果から、思春期以降も母親との間で親密な関係を築き心理的適応を高めている女子青年の姿が示されたが、発達課題である母娘間の分離が回避されているのではないかと考えられ、娘の母親からの第二の分離・個体化の過程が遷延化される傾向にあると考えられた。

**キーワード：**母娘関係、チャムシップ（親友関係）、思春期の母子分離の遷延化、友だち親子

## Abstract

Adolescence is the time of “second separation-individuation.” Children have to separate from their parents psychologically and create themselves as individuals. At the same time, they begin keeping secrets from their parents and form intimate friendships among same-sex friends. Recently, it has been said that the parent-child relationship during adolescence has become like friendship. In this study, we examined the relationship between the recalled parent-child relationship and self-esteem in female adolescents. We used the Parental Bonding Instrument scale (PBI), which measured the traditional parent-child relationship, and the chumship-experience scale, which measured equal friendship. We found that as the nurturing tendency of the recalled parent-child relationship increased, the self-esteem of female adolescents increased. Additionally, when the tendency of “solidarity and sharing between mother and child” and “identification with mother” was high, the self-esteem of female adolescents increased. When female adolescents experienced a chumship relationship with their mother, which they originally experienced among same-sex friends, their self-esteem showed a higher score. The results show that female adolescents tend to have intimate relationships with their mothers during adolescence which helps maintain their mental health, although separation from their mother is avoided because they are closely attached to their mother. Therefore, it is considered that the process of the second separation-individuation of young women from their mother is delayed.

**Keywords:** mother-daughter relationship, chumship,  
postponement of separation between parent and child in adolescence,  
parent-child relationship like friendship

## I. 問題・目的

### 1. 思春期の母娘関係と、娘の自立を支える同性友人関係

思春期から青年期は、「第二の分離・個体化」(Blos, 1962)と言われるように、子どもが心理的に親からの分離を行い個としての自己を形成することが重要な発達段階である。同時にこの時期は、親に対して秘密を持つことや、同性友人との間で親密な関係を築き友人間で秘密の共有を行うことが、心理的な親離れを行う上で重要となる。また思春期は、子どもから大人へと実存的な次元での変化を内包した時期であるとともに、様々な心理発達上の問題が生じる時期でもあるが、この時期を乗り越える上で情緒的な守りの機能を果たすものの一つとして、親しい同性友人関係が挙げられる(須藤, 2003)。Sullivan (1953ab) は、この時期の愛他的な親友関係を chumship (チャムシップ) と呼び、この関係がそれ以前の発達の歪みを修復すると同時に、以降の心理発達を促進するという点で、大きな意味を持つものとして重視している。

ところで、同性友人関係における性差については、これまで様々な研究がなされており、女性が男性に比べて友人に対して相互依存や自己開示を期待している傾向があること(和田, 1993/1996) や、男性が互いの独立を前提とした付き合いをするのに対し、女性は青年期のどの段階でも理解・共鳴し合う密着した関係を持っていること(落合・佐藤, 1996、長沼・落合, 1998) などが指摘されてきた。男性にとって、同性友人の存在は、母親とは別の性である男性同士の関係であるのに対し、女性にとって、同性友人の存在は、母親と同じ性となり母親との連続性を伴うという点で、男性と女性で同性友人の持つ意味が異なると考えられる(須藤, 2010)。女性においては、思春期以降に母親との心理的な分離を行うに際して、母親と同じ性である同性友人の存在は、母親の代理的な役割を担う面があると考えられる。よって、それまでの母親との関係が同性友人関係に持ち込まれる可能性があり、母親との関係性と同性友人との関係性は連続性を伴うものであると言える。

ここで、女性は思春期において、それまでの母親との関係を基盤にした上で、母親とは異なる自己を形作る道りを歩み始めることが求められるが、母親とは別の同性を同一化の対象として、そのプロセスを進めることが必要となる。精神分析家の Deutsch (1944) は、思春期の少女の心性について、「少女が成長し、経験を積んでゆく過程のいたるところに、母親への愛着が少女の心理の中で果たしている役割の大きい」と言い、「女性の一生におけるさまざまな行為の多くは、母親から独立しようとする衝動的な努力の現れであって、彼女の心理的安定と一生の運命は、この試みが成功するか否かによって決まることも一再ではない」と述べ、母親からの分離や独立を目指す動きが娘にとって重要な自分作りに寄与すると考えられる。このプロセスの中で、新たな同一化の対象となる同性の友人は、母親との連続性を持ちながらも母とは異なる自分作りにおいて、娘の自立を支える存在になり得ると言えよう。思春期の女性たちが、同性友人との間で恋愛感情を伴う体験の秘密を持ったり、流行りのファッションを取り入れ、友人と類似の服装を選ぶなど、外見に意識を向けるのも思春期に特有の現象であるが、こ

れらは自分作りを始めるこの時期にとってとても意味のある現象である。母親の側としても、今まで何でも自分に話してくれていた娘が秘密を持つようになり、自身の知らない世界を友人と共有していることに一抹の寂しさを感じながらも、娘の成長過程としてそれを見守り、見送る立場となることが自然な展開となる。ところが近年、その傾向に少し変化が起こっているようである。

## 2. 親子関係の“友だち”化

近年「友だち親子」という言葉が注目されている（黒沢、2010、山登、2013、ヴィヒャルト、2009）。NHK 放送文化研究所（2012）の、「中学生・高校生の生活と意識調査」（全国の12～18歳の男女の親子対象）によると、悩みごとの相談相手として、中学生で4割、高校生では6割の人が「友だち」と回答したが、過去30年間の推移をみると、中高とも「友だち」に相談する人が減り、「お母さん」に相談する人が増えているという（中高全体で「友だち」は50.4%、「お母さん」は31.8%）。親の方は、「日ごろお子さんに対して、どういう親でありたいと思っていますか」という質問に対して、「子どもに尊敬されるような権威のある親」と回答した父親は44.3%、母親は19.4%である一方、「何でも話し合える友だちのような親」でありたいと回答した父親は54.2%、母親は79.2%であった。特に母親は子どもに対して厳しく接するのではなく、子どもと友だちのように仲良く対等な関係を築きたいと考える傾向が半数以上を示していた。また、黒沢（2010）は、Benesseの調査結果より、2004年と比べ、親子関係がより親密になっていることを指摘する。調査結果によると、小6から中2にかけて友だちや学校のことを親と多く会話する子どもが増えており、高校生でも友だちのことについて親との会話頻度は増えていた。親は子に勉強を教え、相談に乗り、褒めるなどの肯定的な関わりが増え、干渉や強制といった否定的な関わりは減っていた。親は子どもをある程度大人として扱い、あまり口出しをせず、それなりにしかってくれる。黒沢によれば、我が子を尊重し、しつけや教育に熱心な親の姿が浮かび上がり、親子関係は良好で親密になっていると言い、いわゆる「友だち親子」化が進んでいると言う。子どもが親に友だちや学校のことをよく話し、親が子どもを尊重している様子、親子でテレビ番組などの共通の話題を持ち、買い物や旅行にも一緒に出かけ、仲良しで居続ける様子が伺えると述べる。子どもは母親の愚痴もよく聞き、反抗期はあまり顕在化せず、せいぜいプチ反抗期がある程度とのことである。

こういった複数の指摘やいくつかの調査結果より、親子関係のあり方が、従来に比べて、タテの上下関係からヨコの水平関係へ変化しているということがうかがわれる。いわば、親子関係の友だち化とも言える現象であると言えよう。親自身が子どもに対して権威的に振る舞うことを嫌い、子どもの気持ちを理解する親でありたいという思いがその背景にあるようである。では、なぜこのような傾向がみられるようになったのだろうか。

山登（2013）によると、「友だち親子」の出現には歴史的背景があり、高度経済成長期に都市部を中心に進んだ核家族化、少子化、親の高学歴化、富裕化、個人主義化といった現象が挙げられると言う。山登によると、高い教育を受け個人主義を身に付けた親は、親子で時間や文化を共有し、共同体の利益より家族のそれを優位に置くようになった。また権威に対して拒否

的な態度をとるとともに、自分も子どもに対して権威的に振る舞うことを嫌うと述べる。このような経緯から親子の距離は近くなり、タテの関係よりヨコの関係が好まれるようになったと結論付ける。また、高度経済成長期に、父親が企業戦士として駆り出され、家庭には母親と子どもが残されたことから、母と子の距離が接近し、父親は家庭に居場所を失って、いわゆる母子密着、父性欠如の家族が生まれたことを考えると、友だち親子も歴史の産物であり、特別な家庭に生じた特別な現象でもないと言う。以上より、親子の友だち化という現象は、今に始まったことではなく、戦後の日本の社会経済背景を受けて必然的に生じたことであるという視座は重要であろう。家族という単位が核家族という小さな単位になり、親子のユニットが形成され、特に家庭の中で、母親と子どもがかつて以上に強固な絆で結ばれるようになったのは、歴史的にも浅くないと言える。

社会学者の土井（2009/2014）もまた、昨今の親子関係はフラット化していることや、思春期の子どもたちから反抗期が消えつつあると指摘する。土井（2009）は、友だち同士のように何でも対等に語り合えるような親子関係を望む親たちが昨今大幅に増えており、そのような親の意向を鋭敏に感じ取る子どもたちは、親子間に波乱や対立が持ち込まれることをできるだけ避けようとして、本音をぶつけられないという親子の姿を指摘する。

これらの指摘から、昨今の社会全体の傾向として、子どもに対する大人が「理解のある」大人であろうとすることで、世代や立場を異にする大人と子どもの間にかつては立ちはだかつていた心理的な「壁」が取り払われる傾向にあるのではないかと考えられる。それによって、思春期の親子間において、反抗期がマイルドなものになるなど、表面的には対立や葛藤が持ち込まれにくい構造になっているように思われる。ヴィヒャルト（2009）は、「子どもは自立するときに親に反抗し、ぶつかり親から離れていくが、友だち親子には少なくとも顕在化する衝突はない。そもそも娘がぶつかろうにもそこに乗り越えなければならぬ親の壁がみえない」と言う。思春期の親子間だけでなく、この年代の子どもに関わる教師と生徒間においても、一般的に世代間の衝突や対立構造が取り払われる現象が生じているのではないか。

### 3. 思春期の母娘関係と自尊感情

以上の問題意識を受け、本研究では、思春期の母娘関係を従来型の親子関係で捉える視点と、近年指摘されているように親子関係を水平関係で捉える視点の両者を用いて親子関係を測定し、大学生の自尊感情との関連を検討することとした。また、どのような親子関係が娘の自尊感情に影響を与えているのかを検討することを目的とした。ここで、従来型の親子関係を捉える視点として、Parker（1979）によって開発されたPBI（Parental Bonding Instrument）を参照した。PBIは、精神疾患を持つ患者の親子関係に着目した家族研究が行われてきた流れの中で開発された尺度であり、成長を促したり阻害したりする親子関係の要因に関する研究において見いだされた共通の因子から構成される尺度である。Bowlbyらの愛着行動の理論に基づき、親は子どもに十分な愛情と愛着を与え、かつ徐々に親から離れ、同年代の友人や他の大人との関係を結ぶのを後押しするべきであり、それがなされないとのちに様々な精神的問題が起こるという理論的基盤を持つ。Parker（1979）は、最終的にこのような共通の因子を2つにまと

め、子どもから見た親の養育態度の自覚的評価スケールである PBI を作成した。作成された 2 つの因子は養護因子と過保護因子であり、養護因子は、愛着、暖かさ、共感、親密さなどの項目からなり（逆の意味として無関心、拒否が入る）、過保護因子は、幼児扱い、自立的行動の妨害などからなる（逆の意味として自主、独立を促すことが入る）。なお PBI は小川（1991）によって日本語版が作成された。小川（1994）の研究では、不安神経症患者において、健常対照者と比べて親の養育態度は養護の程度が低く、過保護傾向が強いことがわかった。よって、子にとって健康的な成長や自立に関わる親の養育態度とは、PBI の養護因子に示される親からの情緒的関わりや、過保護因子の逆転項目となっている自立や独立を促す関わりであると考えられる。以上より本研究では、従来型の親子関係を捉える視点として、PBI の養護因子、過保護（逆転内容として自立）因子の 2 軸から捉えることとした。

思春期から青年期の母娘関係と、娘の自尊感情について検討した近年の研究には、次のようなものがある。小川ら（2011）では、青年期女子の自尊感情には、母親の養育態度へのイメージからの影響が確認されており、娘が母親に頼もしいという養育態度イメージを持っている場合、親から肯定されていると考える傾向にあり、それが自らの肯定に繋がり、自尊感情を高めていた。よって、青年期女子の自尊感情は、娘が勝手に自分ひとりで構築していくのではなく、必ず、同性である母親の自分への評価を経由して、自己評価するという構造が示されている。また、野間ら（2013）は、女子大学生において、母親との距離が近いことが娘の自尊感情を高め、抑うつを低減させるという結果が得られており、母と娘の距離が近いことが肯定的に捉えられている。さらに江上ら（2018）では、青年期後期の娘とその母親が密着した関係を築く要因と、その密着した関係と母子それぞれの適応との関係を検討しており、母子ともに密着度が高い「密着群」の母子は互いの関係に満足し、母親は娘の自立した姿を肯定的に評価し、娘は母へ感謝の念や人生のモデル、対等な関係の全てにおいて高い評価を下し、母親を精神的な拠り所としていた。この研究では、母親と青年期後期の娘との密着した関係はおおむね親密性の保持や信頼感の高さなどの良好な姿として捉えられている。以上の先行研究から、青年期の女子にとって、自身の自尊感情は、母から肯定されていると感じると高くなる傾向や、母親との距離の近い密着した関係が適応的であるという見解が複数示されている。

以上を受け、本研究では、従来より認識されている親の養育態度と、近年指摘されている「友だち親子」のような対等な友人関係に相似した親子関係を測定し、娘の自尊感情との関連を検討することとした。一般的な養育態度を測定するものとして、前述の PBI 日本語版（小川，1991）を使用し、母親の愛情・共感的な養育態度と、過保護・過干渉的な養育態度の 2 軸から測定する。また、「友だち親子」のような対等に近い親子関係を測定するため、須藤（2003）の chumship 体験尺度を、母親を対象としたものにアレンジして使用することとした。chumship 体験尺度は、友人間での自己開示や独占性、同一視する傾向などを測定する尺度であり、江上ら（2018）で用いられた「母子密着尺度」（娘）と内容的に共通するもの（「私は母にその日あった出来事や仲間のことをよく話す」「私が考えていることを母はよく知っている」など）もあるが、本研究では母娘関係を、より友人関係的な側面から捉えることを目的としたため、chumship 体験尺度の内容を用いて母娘関係を測定した。

なお、本研究では以下の3つの仮説を立てた。

仮説1 「子ども時代の母親の養育態度において、養護的側面を強く感じている大学生女子は、自尊感情が高い。」

仮説2 「子ども時代の母親の養育態度において、過保護的側面を強く感じている大学生女子は、自尊感情が低い。」

仮説3 「母親との間に chumship 体験を持っている大学生女子は自尊感情が高い。」

仮説1・2の根拠としては、小川（1994）より、不安神経症患者において、親の養育態度は養護の程度が低く、過保護傾向が強かったことから、母親の養育態度において、娘が養護的側面を強く感じているほど適応はよく、母からの愛情を感じて自尊感情が高くなり、逆に娘が過保護的側面を強く感じているほど適応は悪くなり、子ども扱いされていると感じて自尊感情が低くなると考えたことが挙げられる。また仮説3を立てた理由は、小川ら（2011）、野間ら（2013）、江上ら（2018）に示されるように、母娘間の親密性、密着関係は娘の自尊感情や心理的適応において肯定的な影響があるとされていることから、母娘間で chumship のような親密な関係を体験している場合、娘の自尊感情が高くなると考えたためである。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

A大学の講義受講者を対象に、またスノーサンプリング形式で2020年11月上旬に、Googleフォーム上の質問紙にて調査協力を呼びかけ、回答を依頼した。回答は、大学生136名（女性129名、男性5名、性別の回答なし2名）から得られたが、本研究の目的に鑑み、性別で男性を選択した5名と、性別の回答のなかった2名の計7名を除外し、大学生女子129名を分析対象者とした。平均年齢は20.29歳（SD=0.83）であった。

### 2. 質問紙の構成

#### （1）自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）

Rosenberg（1965）が作成した尺度の日本語版を用いた。自尊感情とは、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことであると定義され、項目内容は、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「色々な良い素質もっている」「だいたいにおいて、自分に満足している」等からなる。5件法で、全10項目であった。

#### （2）Parental Bonding Instrument（PBI）尺度

小川（1991）による日本語訳版を用いた（表1）。4件法で、「養護」12項目、「過保護」13項目の全25項目から構成されていた。対象者には、16歳までの母親の養育態度について回想により回答を求めた。教示は次の通りであった。「この質問はあなたの養育者のさまざまな態度や行動に関するものです。あなたが16歳までの、あなたの母親について、覚えている通りに

表 1. PBI (Parental Bonding Instrument) 尺度の内容

	項目内容
養護 項目	1 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた。
	2 私が必要とするほどは助けてくれなかった。(R)
	4 情緒的には私に冷たいように思えた。(R)
	5 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた。
	6 私に優しく、慈愛があった。
	11 私と物事について語り合うのを楽しんだ。
	12 よく私に微笑みかけた。
	14 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには思えなかった。(R)
	16 私は求められていないと感じさせられた。(R)
	17 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた。
過保護 項目	18 私とは多くは話さなかった。(R)
	24 私を誉めることはなかった。(R)
	3 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた。(R)
	7 私が自分自身で決定を下すのを好んだ。(R)
	8 私に成長してほしいしなかった。
	9 私のすることはすべてコントロールしようとした。
	10 私のプライバシーをおかした。
	13 私を子供あつかいしがちだった。
	15 私自身に決定を下させた。(R)
	19 私を母に依存させようとしていた。
	20 母がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた。
	21 私が望むだけの自由を与えてくれた。(R)
	22 望むだけ外出させてくれた。(R)
	23 過保護だった。
	25 私が望むような服装をさせてくれた。(R)

※ (R)は逆転項目を指す。

もっとも適当と思える番号を選択してください。」

### (3) 対母親 chumship 体験尺度

chumship 体験尺度 (須藤, 2003) をアレンジして用いた。chumship 体験尺度は本来、前青年期の親密な同性友人関係を測定する目的で作成されたが、本研究では友人関係のような対等で親密な母娘関係を測定することを目的としたため、質問項目の「相手」を「(自身の) 母親」に置き換えて回答するように参加者に教示した。教示内容は「あなたが16歳までの母親との関係を思い出し、その母親との関係で次のようなことがどのくらい当てはまるか答えてください」とした。7件法で、全19項目であった。

## 3. 結果の統計的分析

IBM SPSS Statistic 24を用いて行った。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 各尺度の得点の記述統計量

自尊感情尺度、PBI 尺度、対母親 chumship 体験尺度の各尺度の得点の記述統計量を求めた。結果を表 2 に示す。

#### 2. 対母親 chumship 体験尺度の因子分析

因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、2 因子を抽出した（表 3）。この過程で、因子負荷量の低い項目 15 を削除した。各因子は、項目内容から、「母親との連帯・共有の強さ」（因子 1）、「母親との同一化」（因子 2）と命名した。

表 2. 各尺度得点の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
「自尊感情」得点	11	46	27.53	8.03
PBI「養護」得点	5	36	28.32	7.15
PBI「過保護」得点	0	34	12.08	6.36
「対母親 chumship」得点	23	129	87.81	19.82

※「対母親 chumship」得点については、因子分析で除外された項目 15 を除く。

表 3. 対母親 chumship 体験尺度因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）

	因子 1： 母親との連帯・ 共有の強さ	因子 2： 母親との 同一化
14. 他の人には話さないことでも相手（母親）には話した。	0.815	-0.116
18. 相手（母親）とは何でも話せた。	0.774	0.022
5. できるだけ二人でいたいと思った。	0.761	-0.112
13. なにかにつけて一緒に行動した。	0.710	-0.204
11. 相手（母親）がいないとさびしくなった。	0.615	-0.060
1. 相手（母親）との間で連帯感を感じた。	0.605	0.037
7. お互いの気持ちを感じ取ることができた。	0.596	0.260
4. 相手（母親）とはいろいろなことに対する感じ方が似ていたと思う。	0.581	0.124
8. お互いに助け合うことができた。	0.521	0.314
19. 自分と同じようであってほしいと思った。	0.401	0.191
2. 生活のなかのいろいろなことに対し思うことを言い合い確認した。	0.398	0.093
6. 自分のなかにはないものを相手（母親）のなかに見つけた。	-0.362	0.905
3. 相手（母親）にあこがれの気持ちをもっていた。	0.004	0.833
9. 相手（母親）に好感を持ち、同じようになりたいと思った。	0.121	0.764
12. 自分が好ましいと思うものを相手（母親）がもっていてうらやましく感じた。	-0.071	0.699
10. 相手（母親）が関心を持つことに自分も興味をもった。	0.079	0.594
17. 相手（母親）のいろいろな部分に影響された。	0.276	0.557
16. 相手（母親）とのやりとりのなかで、自分というものがわかってきた。	0.155	0.549
	説明分散	
	7.242	1.473

表 4. 各変数間の相関係数

	「自尊感情」 得点	PBI 「養護」 得点	PBI 「過保護」 得点	「対母親 chumship」 得点
「自尊感情」得点	1			
PBI「養護」得点	.262**	1		
PBI「過保護」得点	-0.093	-.488**	1	
「対母親 chumship」得点	.337**	.730**	-.371**	1

\*\*p < .01、\*p < .05

### 3. 各尺度の変数間の相関分析

各尺度の変数間の関連を調べるため、Pearson の相関係数を求めた（表 4）。その結果、PBI「養護」得点と「自尊感情」得点の間に有意な弱い正の相関、「対母親 chumship」得点と「自尊感情」得点の間に有意な中程度の相関があった。また、「養護」得点と「対母親 chumship」得点とは有意な強い正の相関、「過保護」得点と「対母親 chumship」得点との間には有意な中程度の負の相関があった。

### 4. 親の養育態度と自尊感情の関係の分析

大学生女子が想起する16歳までの親子関係と、自尊感情の相互関係を分析するため、16歳までの親子関係について回答された、「養護」得点と「過保護」得点の程度および「対母親 chumship」得点を説明変数とし、「自尊感情」得点を基準変数とする重回帰分析を行った（強制投入法による）。結果を表 5 と図 1 に示す。

分析の結果、説明率は11.3%で、説明率の検定は5%水準で有意であった（ $F=5.33$ ,  $df=3$ ）。標準偏回帰係数の有意性をみると、「対母親 chumship」得点には有意水準5%で有意な正の係数を示した。16歳までの母親の養育態度において、対母親 chumship 体験尺度に示される、「母親との連帯・共有の強さ」および「母親との同一化」が強いと感じている者ほど、「自尊感情」得点が高かった。

## IV. 考 察

大学生女子が想起する16歳までの母親との関係において、母親の養育態度の「養護」得点が高いほど「自尊感情」得点が高いということが分かった。16歳までの母親との関係の中で、暖かく親しみのある情緒的な関わりを行っていた、母親が自分のことについて理解してくれていたと感じられているほど、娘の自尊感情が高い傾向がみられた。

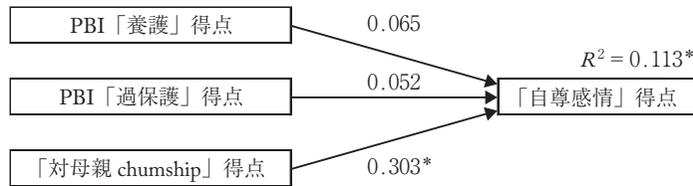
また、16歳までの「母親との連帯・共有の強さ」「母親との同一化」の強さが、大学生女子の「自尊感情」得点と関連していることが示された。大学生女子が16歳までの母親との関係の中で、日々感じることを共有したり、母親をモデルとするような関係を体験しているほど、自尊感情が高いことが明らかになった。

表 5. 重回帰分析結果

説明変数	B	SE B	$\beta$
PBI「養護」得点	0.073	0.148	0.065
PBI「過保護」得点	0.066	0.121	0.052
「対母親 chumship」得点	0.128	0.052	0.303*
$R^2$	0.113*		

基準変数：「自尊感情」得点

\*\*p < .01、\*p < .05



\*\*p < .01、\*p < .05

図 1. 重回帰分析の結果

ここで、「養護」得点と、「対母親 chumship」得点との間には有意な強い正の相関があったことから、両者は共通した関係の特徴を持つと考えることができる。娘にとって、母親との間の、親しみが有り、自分を理解してくれていると感じられるような関係性は、「養護」因子と「対母親 chumship 体験」の中の特に「(母親との) 連帯・共有の強さ」因子に共通しており、それらが娘の自尊感情を高めることとなることが示されたと言えよう。一方で、「養護」得点よりも「対母親 chumship」得点の方が、「自尊感情」得点への影響が強いことが示されたことから、母親との間での共有体験の強さや、相手を自分のものとして取り入れようとする母親との同一化の志向性の高い、一体感を伴う関係性を持つことが、娘の自尊感情を高めるという結果が出たことは大変興味深い。本来、同性友人を対象に作成された chumship 体験尺度であるが、現代の大学生女子においては、思春期頃に同性友人との間で本来体験するとされてきた関係性を、友人ではなく母親との間で体験することが、自尊感情との関連を示したと言える。このような現象については、先に挙げた先行研究（小川ら, 2011、野間ら, 2013、江上ら, 2018）とも共通する傾向であると言えるが、どのようなことがその背景にあるのだろうか？

一つには、「友だち親子」に表現されるように、現代の「親子関係の友だち化」が関係しているのではないかと考える。今回の調査結果からも、同性同士の親子である母と娘は、思春期において、分離を目指すのではなく、互いに親密な関係を継続していることがうかがわれる。思春期という不安定な時期の中に置かれた娘は、分離をめぐって母親との葛藤的な関係を生きるより、母親との親密で良好な関係を結び、母親と同一化する一体感をもった関係を築く方が、分離の苦しさを引き受けなくてよいということがあるのではないかと考えられる。母親側も娘との分離は寂しく苦しいものがあるため、分離して個々の存在となることを阻む力が双方の間に働いているのではないかと考えられる。思春期について詳述している精神分析家の Blos, P. (1962) は、

「女の子はその思春期を通じて、より強く対象関係で骨折ることになる。事実、遷延されていた母親との苦しい切断が、この時期の主要な課題となるのである」と述べるが、実際には、現代の思春期を生きる女性たちは、母親との一体感を持った関係をつなぐことで「苦しい切断」を回避しているとみることもできるかもしれない。母親側の不安も大きく、親自身が子の自立を促す方向に働きかけることが難しくなっているのではないかと思われる。

むろん、従来から母親は娘にとって女性のモデルとして同一化の対象でもあり、人生の先輩として生きる方向性を示す存在であったと考えられ、思春期以降、突然に関係を断ち切るような展開にはなり難く、娘は母親から同性友人などへと、秘密の共有や自己開示の相手を徐々に段階的にシフトしていきながら、愛着対象を母親から友人などの対象へと移行していくものである。しかしながら、今回示された結果からは、思春期以降も母娘の間で強固な絆を築いている親子のありようや、そのことが娘の自尊感情の高さに結びつくということが分かったことから、母娘間の分離については、表面的に一体化することで分離する動きが否定され、遷延化されているのではないかと思われる。複数の先行研究においても、親密な母娘関係を持つことが双方の心理的適応にも良い影響を及ぼすことが示され、敢えて分離せずに親密さを継続することが肯定されているように思われる。Deutsch (1944) は、思春期の少女の心性について、「少女が成長し、経験を積んでゆく過程のいたるところに、母親への愛着が少女の心理の中で果たしている役割の大きい」ことを示している。今回の結果からも、確かに母への愛着が娘の自尊感情に影響を及ぼすことが示されたと言えるが、その状態が肯定的に捉えられている先行研究も多く、母娘間の分離のプロセスは重視されていないようにも受け止められる。

以上を受け、現代においては、娘の母親からの第二の分離・個体化の体験が遷延化される傾向にあるのではないかと考えられる。黒沢 (2010) は、熱心で「やさしい」親の期待を背負い、環境に恵まれた「よい子」の自立が遷延する傾向を指摘する。土井 (2014) は、フラット化しているという現代の親子関係について、「親子の間で本音をぶつけあって関係を深めていくのではなく、現状の関係を円滑に保とうとする圧力が強く働く」と述べ、親子関係の友だち化について、親と衝突せざるを得ないような独自の価値観を、子どもたちが自らの内面に確立できずにいるという点で決して望ましい事態ではない、と言う。また、土井は子どもと対等な関係を築きたいという物分りの良さそうな親たちの態度は、子どもに対して自己承認を求める依存的な心性の裏返しであるとして問題視する。このように、母親自身が娘と心理的に距離を取ることが難しくなっていることには、親自身が抱える不安の存在が影響していることも考えられる。また、母親が娘の人生を通じて自身の思春期心性をもう一度生きることとなり、娘の体験をわがことのように感じているのかもしれない。

母娘関係が友だち化することの否定的な側面にはどのようなことがあるだろうか。Deutsch (1944) は、思春期女性の心性について、「少女の母親との関係はいつそう永続的であり、少年の場合よりもしばしば強く、危険である」、「思春前期の少女にとって、母親への愛着は、父親への愛着よりも恐ろしい危険をはらみがちである。娘の成長のためには、母親は父親よりも大きな障害となることがあるのである」と述べる。母親と娘の密着関係、距離の近い関係は、一時的な互いの精神的安定をもたらすとはいえ、永続的にみると互いの自立を阻む関係になりか

ねないのではないだろうか。黒沢（2010）によると、「友だち親子」では、親子が理解し合うだけでなく、同質化する傾向も深まる可能性を指摘する。「親子カプセル」化現象とも言える孤立した1つのカプセルの中で、親子が同質に混ざり合い、ボーダーレス（境界線がない）状態になることで、異質であることへの拒否反応や排除の力が働き、容易に親子共振状態を招く。黒沢は、大人気ないクレームをつける親が増加しているとの学校現場からの声は「友だち親子」の陰の側面の1つの現れであると指摘する。

親子（母娘）の友だち化現象について、母親と娘はそもそも保護養育関係から始まっているという意味で、本来対等な関係にはなりえないため、無理が生じると考えられる。もちろん、母娘間で、友人間のように互いの思いを共有しながら心理的な安定を得ること自体は問題ではないかもしれないが、母親と娘は親子である以上、構造的に対等になりえないということを今一度念頭に置く必要がある。保護養育関係の中では弱く守られる立場にある娘は、母親に守られながら、思春期の自立のプロセスの中で母親の生き方やあり方を相対化し、母親とは異なる自分を作ることが求められる。ここでいう娘の母親からの自立や母親と娘の分離とは、互いの関係を切ってしまうことではなく、母親の思いと娘の思いをそれぞれに尊重し合うことであると著者は考える。母親と娘では思春期を生きる時代が異なり、取り巻く環境も大きく異なる。母子間で互いの思いを共有して同じように感じるだけではなく、互いを理解しようとしつつも、時に互いを「分かり合えない」ことに向き合う作業も含まれると考える。

最後に、現代において近年指摘されているところの、思春期から青年期にかけての友人関係の希薄化や気遣いの優勢な関係も、親子関係の友だち化と無関係ではないように思われる。彼らは母親との密着した関係を築き、母親を依存対象とし続けることで、第二の分離・個体化のプロセスが遷延化されると同時に、友人を情緒的な支えとする方向にシフトする発達段階の移行プロセスも遷延化しているのではないだろうか。今回の調査対象者には、母親との関係のみを尋ねており、友人関係を併せて測定できなかったため、親子関係の友だち化と、友人関係における気遣いが優勢な関係の関連についての検討は、今後の課題である。

## 謝 辞

本論文で提示したデータは、「演習Ⅰ」で教員の指導のもとに行われたグループ研究で収集したものを著者が再分析したものであり、研究グループの榎原美咲さん、中村真衣さんの協力のもとに公表に至った。ここに2人に感謝の意を述べる。

## 引用文献

- Blos, P. (1962). *On adolescence*. New York: Free Press. 野沢栄司（訳）（1971）. 青年期の精神医学. 誠信書房.
- Deutsch, H. (1944). *The Psychology of Women. Vol. 1 Girlhood*. 懸田克躬・埴英夫（訳）（1963）. 若い女性の心理Ⅰ 思春期のすべて. 日本教文社.
- 土井隆義（2009）. 友だち親子の落とし穴—多様性の時代における不安をめぐって（特集 保護者）. 更生保護, 60(3), 12-17.
- 土井隆義（2014）. 若者たちの“生きづらさ”の正体（第10回） 友だち親子の落とし穴. 月刊学校教育相談, 28(1), 48-51.

- 江上園子・中田沙也加 (2018). 母と娘との密着関係における規定因と帰結の検討. 愛媛大学教育学部紀要, **65**, 117-125.
- 黒沢幸子 (2010). 「友だち親子」の光と陰—危うい「よい子」と「乙 Men」現象— (2009年実施 第2回 子ども生活実態基本調査報告書—小4生～高2生を対象に). Benesse 教育研究開発センター研究所報, **59**, 20-23.
- NHK 放送文化研究所 (2012). 「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」について.  
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/121228.pdf> (2020年3月10日取得)
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係. 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 野間あずさ・牛尾恵・横瀬洋輔・境泉洋 (2013). 女子大学生における母娘関係が娘の自尊感情と抑うつに与える影響. 徳島大学人間科学研究, **21**, 35-47.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. 教育心理学研究, **44**(1), 55-65.
- 小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. 精神科治療学, **6**(10), 1193-1201.
- 小川雅美 (1994). 不安神経症患者と両親の養育態度の関連. 東京女子医科大学雑誌, **64**(5), 418-423.
- 小川由希子・山田智世・杉山里美・上岡美紀・平田裕美 (2011). 父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情との関連—影響を及ぼしているのは父親、それとも母親?—. 女子栄養大学紀要, **42**, 35-41.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Parker, G. (1979). Parental Bonding Instrument. *Br. J. Med. Psychol*, **52**, 1-10.
- 須藤春佳 (2003). 前青年期の「chumship 体験」に関する研究. 心理臨床学研究, **20**, 546-556.
- 須藤春佳 (2010). チャムシップにみられる性差の検討. 前青年期の親友関係「チャムシップ」に関する心理臨床学的研究. 風間書房, pp. 111-120.
- Sullivan, H. S. (1953a). *Conceptions of modern psychiatry*. New York: Norton. 中井久夫・山口隆 (共訳) (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房.
- Sullivan, H. S. (1953b). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. 中井久夫・山口隆 (共訳) (1990). 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- ヴィヒャルト千佳こ (2009). 友だち親子を考える. 児童心理, **63**(4), 342-346.
- 和田実 (1993). 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異. 社会心理学研究, **8**(2), 67-75.
- 和田実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連. 心理学研究, **67**(3), 232-237.
- 山登敬之 (2013). 「友だち親子」をどうみるか (特集 反抗期を乗り切る). 児童心理, **67**(11), 956-960.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

(原稿受理日 2021年3月11日)